

➤ カランダガン (CALANDAGAN) = フランス

せん 4 歳・鹿毛 (アイルランド産・2021 年 1 月 27 日生まれ)

父 : Gleneagles = 母 : Calayana (母の父 : Sinndar)

馬主 : アガ・カーン・スタッズ SCEA

調教師 : フランシスアンリ・グラファール

騎手 : ミカエル・バルザローナ

戦績 : 全 13 戦 7 勝、2 着 5 回、3 着 1 回

総獲得賞金 : 約 7 億 2,690 万円

主な戦績	: '25 英チャンピオンステークス (G1)	1 着
	'25 キングジョージ VI 世&クイーンエリザベスステークス (G1)	1 着
	'25 サンクルー大賞 (G1)	1 着
	'24 キングエドワード VII 世ステークス (G2)	1 着
	'24 オカール賞 (G3)	1 着
	'24 ノアイユ賞 (G3)	1 着
	'25 コロネーションカップ (G1)	2 着
	'25 ドバイシーマクラシック (G1)	2 着
	'24 英チャンピオンステークス (G1)	2 着
	'24 英インターナショナルステークス (G1)	2 着

カランダガンは英 2000 ギニーなど 4 つの G1 を制したグレンイーグルス(その父ガリレオ)の産駒。グレンイーグルス自身は全 7 勝の内、4 勝が芝 1,400m 戦、3 勝が芝 1,600m 戦というマイラーでしたが、産駒には新潟 2 歳ステークスを制したショックアクションや、短距離 G1 であるジュライカップ優勝のミルストリームのような快速馬もいれば、マンノウォースステークスを制したハイランドチーフ、ロワイヤリユー賞のラヴィングドリーム、独ダービーのパラディウムなど距離を伸ばして能力を開花させる馬もいて、バラエティに富んでいます。

母系は母のカラヤナ(父シンダー)がフランスで 2 勝し、G3 ミネルヴ賞の 2 着馬、曾祖母のクロドヴィナは 1 勝でリストッド競走 2 着馬。4 代母のクロドラはオペラ賞(当時 G2)の勝馬で、近親には仏 2000 ギニーを制したクロドヴィル、南アフリカダービーを制したアラゴスタなどがいて、桜花賞馬のニットウチドリも同じ一族の出身です。

2 歳(2023 年)の 8 月にドーヴィル競馬場(芝 1,600m)でデビューしたカランダガンは、これを 3 着とした後に去勢手術を受け、10 月の 2 戦目、シャンティイ競馬場のオールウェザー 1,900m 戦を逃げ切って初勝利を挙げました。鞍上は初戦がバルザローナ騎手で、2 戦目からはステファン・パスキエ騎手になっています。

3 歳時(2024 年)は 6 戦して初戦のフランソワマテ賞(サンクルー、リストッド、芝 2,100m)は 2 着でしたが、4 月のノアイユ賞(パリロンシャン、G3、芝 2,100m)を最後方から差し切って重賞初制覇を飾ると、続くオカール賞(同、芝 2,200m)も 5 頭立ての後方から脚を伸ばして快勝、さらにイギリスに渡って臨んだキングエドワード VII 世ステークス(アスコット、G2、芝 2,390m)は後方 2 番手から鋭く伸びて直線半ばで先頭に立つと、最後は後続に 6 馬身の差をつけて重賞 3 連勝を飾りました。

G1 初挑戦となった 8 月の英インターナショナルステークス(ヨーク、芝 2,050m)では、直線の外から、後にカルティエ賞年度代表馬となるシティオブトロイに迫りますが、1 馬身届かず 2 着まで。続く英チャンピオンステークス(アスコット、G1、芝 2,000m)は中団の内側で直線を迎えて進路がなかなか開かず、残り 200m でわずかにできた隙間から一旦は抜け出しましたが、後方から猛追する伏兵アンマートにゴール前で半馬身かわされ、ここでも 2 着となってシーズンを終了しました。

今年は鞍上をバルザローナ騎手に戻して 4 月のドバイシーマクラシック(メイダン、G1、芝 2,410m)から始動。ここは 9 頭立て 7 番手から、ダノンデサイルの背後で脚を伸ばしたものの同馬に 1 馬身 1/4 差の 2 着となり、ヨーロッパ

に戻って臨んだ6月のコロネーションカップ(エプソム、G1、芝2,410m)もほぼ最後方から直線では外に持ち出されて先に抜け出したヤンブリュージュを懸命に追いましたが、半馬身及ばず2着に惜敗しました。4歳になって最初の勝鞍は地元で迎えた6月29日のサンクルー大賞(サンクルー、G1、芝2,400m)。ここでは5頭立ての4番手からそれまでの鬱憤を晴らすような末脚を爆発させ、残り200mを前に先頭に躍り出ると昨年の凱旋門賞2着馬アヴェンチュールに3馬身半の差をつけて待望のG1初制覇を飾りました。

上半期の一番となった7月26日のキングジョージ VI 世&クイーンエリザベスステークス(アスコット、G1、芝2,390m)は5頭立ての最後方から、直線で先頭に立ったカルパナ(後に英チャンピオンズフィリーズ&メアズステークス優勝)を残り100mでかわしてG1連勝。その後は8月の英インターナショナルステークスへの参戦プランも浮かびましたが、陣営はジャパンカップ遠征も見据え、レース間隔が詰まることを理由にこれを回避。昨年、取り逃した英チャンピオンズステークスに照準を合わせました。

そして前走となる英チャンピオンズステークスは、緩みのない流れとなるなか、後方2番手に控えたカラダガンが、最終コーナーで外から勢いをつけて、残り200mで先頭に立ってそのまま押し切り優勝。G1・3連勝を飾り、つい先日発表されたカルティエ賞で年度代表馬に輝きました。

カラダガンの通算成績は13戦7勝、2着5回、3着1回で4着以下は無し。キャリアのうち5戦は芝2,400m(2,390mと2,410m含む)で、7勝のうち3勝が2,400m戦(2,390m含む)です。左回りは5戦して1勝、2着4回。良馬場で6戦4勝、2着2回、稍重で2戦1勝、2着1回、重と不良馬場では5戦2勝、2着2回で、馬場状態を問わず安定した成績を残しています。クラシックディスタンスのベストタイムはドバイシーマクラシック(2,410m)で計時した2分27秒2(良馬場)となっています。最新のワールドベストレースホースランキングではレーティング130(芝1部門:1,900m〜2,100m)で世界1位となっています。



2025 年 英チャンピオンズステークス (Photo: Ascot)

● 馬主：アガ・カーン・スタツズ SCEA (Aga Khan Studs SCEA)

本馬はアガ・カーン VI 世殿下の所有馬として競走馬のキャリアをスタートさせましたが、同殿下が今年 2 月に逝去されたことに伴い、アガ・カーン・スタツズ SCEA に名義が変わりました (SCEA=Société Civile d'Exploitation Agricole。フランス語で農業経営民事会社の意)。故アガ・カーン VI 世は 1936 年にスイスのジュネーブで生まれ、イスラム教シーア派の一派であるイスマーイーール派の第 49 代イマーム(指導者)として、世界各国で政治的に中立な立場で、貧困の緩和、多元主義とジェンダー平等の促進、そして環境保護などに取り組みました。

祖父の代から大きな成功を収めていた競馬事業を父から引き継ぐと、自身も世界的なオーナーブリーダーとして名を馳せ、自身や長女のザラ王女の名義で制した G1 は 170 以上に上ります。ブラッシンググルームやシャーガーなどの歴史的名馬をはじめ、2000 年代に入ってから凱旋門賞馬のシンダー、ダラカニやザルカヴァ、種牡馬として活躍するシユーニ、英愛ダービー馬のハーザンド、仏ダービー馬のヴァデニなど数多くの G1 馬を競馬界に送り出しました。今年も本馬の他に、ザリガナが仏 1000 ギニー、カンドゥラリがヴィコンテッスヴィジエ賞、シバヤンがオイロパ賞を制しているほか、ダリズが“アガ・カーン家”に史上最多となる 8 つ目の凱旋門賞タイトルを贈っています。

これまで故アガ・カーン VI 世殿下名義の馬では、アスタラバドが 1997 年ジャパンカップで 6 着、シャラナヤが 2009 年エリザベス女王杯で 4 着、シャレータが 2011 年ジャパンカップで 7 着となっています。

● 調教師：フランシスアンリ・グラファール (Francis-Henri Graffard)

1977 年 4 月 27 日生まれ、パリ南東のシャロレー＝ブリオネ地方出身。調教師になるため、アイルランドのジョン・オックス厩舎やフランスのジュアン・ベルトラン・ド・バランダ厩舎のほか、フランスのアルカナ社系列のセリ会社ゴフスなどで経験を積みました。また、人材養成プログラム「ダーレー・フライング・スタート」の一期生として、フランスのアンドレ・ファール厩舎やオーストラリアのゲイ・ウォーターハウス厩舎でも学び、調教師になる前の 3 年は自国の大御所アラン・ドゥロワイエデュプレ厩舎でアシスタントを務めました。

2011 年秋にシャンティイ調教場のラモルレイ地区に厩舎を開業し、最初のシーズンとなった翌 2012 年はパールフルートでシェヌ賞(G3)を制して重賞初勝利を飾るなど 158 戦 24 勝で、獲得賞金順のリーディング 61 位。2015 年以降はリーディング 15 位以内を維持しており、これまでの最高位は昨年の 2 位となっています。初の G1 タイトルは 2015 年のパリ大賞(イラプト)で、以降、2016 年カナディアンインターナショナル(同)、2017 年ヴェルメイユ賞(パティール)、2019 年仏オークス(チャンネル)、コロネーションステークス(ウオッチミー)、2020 年独ダービー(インスウープ)、ロートシルト賞(ウオッチミー)、アベイドロンシャン賞(ウッディド)、クイーンエリザベス II 世ステークス(ザレヴナント)、2022 年ヴェルメイユ賞(スウィートレディ)、2024 年仏 1000 ギニー(ルーヒヤ)、マルセルブーサック賞(パーティカルブルー)を優勝。今年も本馬の他にザリガナ(仏 1000 ギニー)、カンドゥラリ(ヴィコンテッスヴィジエ賞)、ゲゾラ(仏オークス)、ウッドショーナ(ジャンプラ賞)、キジサナ(ジャンロマネ賞)、サーラン(ムーランドロンシャン賞)、ダリズ(凱旋門賞)がフランスで G1 を制して、11 月 20 日現在、593 戦 159 勝、獲得賞金は 2 位の倍近い 1,029 万 1,969 ユーロで、初のリーディングが確定的になっています。また国外でも、ゴリアットのバーデン大賞、シバヤンのオイロパ賞、ゲゾラのブリーダーズカップフィリー&メアターフ、そして本馬を含め 5 つの G1 勝鞍があります。

これまでの日本での管理馬出走はいずれもジャパンカップで、イラプトが 2015 年 6 着、2016 年 14 着、ゴリアットが昨年 6 着でした。

● 騎手：ミカエル・バルザローナ (Mickaël Barzalona)

1991 年 8 月 3 日生まれ、フランス南東部のアヴィニョン出身。コルシカ島の元調教師のクリスチャン・バルザローナの孫、元平地・障害騎手のアルマン・バルザローナの甥にあたります。モンドマルサンにある AFASEC 競馬学校に進み、2008 年にフランスで騎手免許を取得すると、アンドレ・ファール厩舎の見習として翌年に 72 勝を挙げてリーディング 11 位と一気に頭角を現します。2011 年 5 月にウェイヴァリングでサンタリ賞を制して初 G1 勝利を飾り、さらに翌月の英ダービーをプールモアで優勝。1981 年のウォルター・スウィンバーン(シャーガー)以来となる 10

代騎手による英ダービー制覇となりました。

2012 年にゴドルフィンと優先騎乗契約を結ぶと、最初の 2 年はイギリスを拠点に、2014 年からはフランスに戻り、その所有馬で国内外の G1 タイトルを手中に収めていきました。主なものに 2012 年ドバイワールドカップ(モンテロッソ)、英セントレジャー(エンケ)、2017 年ブリーダーズカップターフ(タリスマニック)、2019 年仏 1000 ギニー(キャッスルレディ)、2020 年仏 2000 ギニー(ヴィクトールドラム)、2024 年ムーランドロンシャン賞(トリバリスト)があります。2017 年以降はフランスのリーディングで 4 位以内を維持し、2021 年に 192 勝で初めてトップに立ちました。

今年は主戦を務めることになったアガ・カーン・スタツズの所有馬であるザリガナで仏 1000 ギニー、本馬でサンクルー大賞、キングジョージ VI 世&クイーンエリザベスステークス、英チャンピオンステークス、シバヤンでオイロパ賞、ダリズで凱旋門賞を制したほか、アルシャカブレーシング所有のサーランでムーランドロンシャン賞、ホワイトバーチファーム所有のゲゾラでブリーダーズカップフィリー&メアターフを優勝。3 月から 10 月の成績で競われるフランスの平地リーディングでは 920 戦 164 勝で 3 位でした。

日本では 2013、2014、2016 年に短期免許を取得して騎乗しており、ここまで JRA 通算 226 戦 19 勝。重賞勝鞍に 2013 年朝日チャレンジカップ(アルキメデス)、2014 年福島記念(ミトラ)、2016 年京阪杯(ネロ)があるほか、2016 年の朝日杯フューチュリティステークスではモンドキャンノで 2 着があります。